

リ  
セ  
ツ  
ト  
フ

▼ ジーン

ルーナの長兄。  
リュシオンの腹心。  
魔物の猛毒により、  
危篤状態になっている。

◀ カイン (20歳)

ルーナに助けられ、  
公爵家に身を寄せていた、  
エアデルト国の第二王子。  
現在はクレセニアに留学中。

▲ モルガナ

不思議な力で人を  
癒す少女。移民の町で  
「盲目の聖女」と呼ばれ、  
崇められていたが……

▲ ローズ

ピカーナの町で出会った、  
名高い傭兵団「栄光」の  
女団長。

▲ フレイル (18歳)

レングランド学院卒業後、  
魔法師団に入団した  
精霊使いの少年。  
他人にはその力を  
秘密にしている。

▲ 水姫

ルーナの守護者たち

▲ 風姫

▲ 焔王  
ディグルレーメ

▲ レグルス

▲ シリウス

▲ リュシオン (21歳)

クレセニアの王太子。  
強大な魔力を持つ魔法使い。

▲ ルーナ (14歳)

千幸が転生した姿。  
リヒトルーチェ公爵令嬢。  
前世の記憶と強大な魔力を  
持ちつつ人生やり直し中。

千幸 (享年18歳) ▲  
超不幸体質の女子高生。

## 第一章 残された傷痕

零れ落ちた未来を、諦めることができますか？

クレセニア王国。その王都、ライデール。

王都の北側周辺には国王の住まう宮があり、貴族たちの館が集まる区域となっている。

堂々たる館が多く立ち並ぶ中でも、北端にある美しく壮大な建築物は、ひと際人々の目を引く。

陽の光を浴びて壁面に埋め込まれた輝石が輝く様から、白焔宮とも呼ばれるクレセニア王宮だ。

王太子リュシオンの住まう宮は、王宮の西翼にあつた。

宮は広く、主であるリュシオンの私室の他に、いくつかの客間や十数人が会食できる食堂などがある。他にも、居間、会議室、応接室、書齋や図書室など、一人で住むには十分すぎるほどだ。

以前はその広さを持って余し気味だったが、最近では違う。ジーンをはじめとするリュシオンの側近が、頻繁に泊まり込むようになったからだ。

今、ルーナたちがいるのも、よく使われる客間の一室だった。

入つてすぐのところテーブルや椅子が設えられた居間があり、奥の扉からは寝室に入ることが

できる。

居間には、執務に使うためか大きな机や書棚が置いてあり、寛ぐ場所というよりは書齋といった雰囲気強い。

調度品の装飾は控えめで、豪華な飾りよりも木や石などの素材の良さを生かしたものがかり。続き部屋の寝室も同じような調度品が置かれていた。

赤みを帯びた木材で作られた大きな寝台には、派手な象嵌の類は見られない。だが、彫刻のみでも一流のものだということはある。

現在この部屋にいるのはルーナとカインに加え、ルーナの守護神獣であるシリウスとレグルス、そして風姫と水姫。さらに、先ほどルーナと契約を交わした火の精霊王——焰王、ディグルレーメもいる。

十分な広さのある寝室だったが、緊迫した空気のせいで妙な圧迫感があった。

「兄様すっかりして！」

ルーナは、寝台に横たわった兄ジーンの手を握り、必死に声をかける。

しかし答える声はなく、握った手もだらりと脱力したままだ。

「兄様、兄様、お願い……」

ルーナはジーンの手を額に押しつけると、返事を求めて繰り返す。しかし、意識のないジーンが声を発することはなかった。

彼の手は熱のせいで熱く汗ばみ、荒い息からはその容体の悪さが窺える。そんな兄の姿を悄然と

見つめるルーナの肩へ、後方から慰めるようにぬくもりが触れた。

「カイン……」

気遣わしげな顔をみせるカインへ、ルーナは涙に濡れた目を向ける。

掠れた声で、縋るように見つめてくるルーナに、カインは安心させるように言い聞かせた。

「ルーナ、大丈夫です。すぐにリュシオンが医師を連れて来てくれるはずです」

カインの言葉を聞き、ルーナは何度もうなづく。

地下水路でのヒュドラとの戦闘により、重傷を負ったジーン。

一刻も早い治療が必要なことから、ジーンを公爵邸ではなく、常に医師が待機する王宮に転移させると判断したのはリュシオンだ。

そうして王宮に到着するやいなや、彼は主治医を連れてくるために部屋を出て行ったのだった。

「お医者様が来たらすぐに治療してもらおうからね。そしたら大丈夫だよ」

ルーナは、ジーンに向かって声をかけるが、それは話しかけるといよりは、自分に言い聞かせるようだった。

ジーンはヒュドラに肩を噛みつかれた際、肩全体を骨折している。

単純な骨折であれば、治療魔法によって治すことができるが、砕け散った骨を治すとすると、砕けた骨を整形してから治療を施さなければならない。

何故なら、そのまま治療魔法を行えば、欠損、あるいは歪な状態で骨がくっついてしまうからだ。骨折自体は治っても、損傷箇所に致命的な不具合を残してしまう。

白魔法といえど、万能ではない。失った手足を元に戻せないのと同じく、欠けたり歪んだりしたまま固まってしまえば、その後はどうすることもできないのだ。

だからこそ、防御魔法などで負傷することを避ける戦い方が望ましいとされている。

魔法語は、長い年月を経て失われてしまったとされるものも多い。にもかかわらず、防御魔法だけは今も多く伝わっているのは、そういった事情があるからなのだろう。

(兄様……ジーン兄様……)

ジーンの苦しい様子に、これ以上声をかけるのを躊躇ったルーナは、心の中で必死に呼びかける。

骨にまで達する傷の方は、医師が来るまで本格的な治療魔法を施せない。だがそれ以上に、ルーナを焦らせるのは別の要因だった。

負傷し衰弱したジーンを苦しめる高熱。おそらくヒュドラによる毒だ。

そう思い至つてすぐに、ルーナは白魔法である〈解毒〉の魔法を兄にかけた。

〈解毒〉には身体に害を及ぼす要因を除去したり、毒の拡散を抑えたりする働きがある。

しかしジーンの場合、〈解毒〉を試みても熱は一向に引くことなく、怪我からくる発熱と合わさつて予断を許さない状況になっていた。

(どうして効かないの……?)

ルーナは途方に暮れて、ジーンの手が滲んだ額に手を置く。

「毒じゃないの……?」

悔しげにつぶやくルーナに、カインが答える。

「わかりません。それか、あの怪物特有の攻撃なのか……」

ジーンを傷つけた怪物——ヒュドラ。

本来ならば、人里離れた秘境に棲息する魔物だ。強力な力を持つがゆえ討伐記録が少なく、その生態については謎が多い。

蛇に似たヒュドラの姿形から『毒』と仮定したものの、実際のところそれが正しいかどうかは誰もわかっていなかった。

「ヒュドラか……」

〈解毒〉が効かないのは確かに異常だが、傷だけでここまでの高熱になるのはおかしい。やはり毒とみるのが妥当だろうな

ジーンの眠る寝台に前足をかけ、シリウスとレグルスもそう判断する。

「でもこのままじゃ……」

そこまで口に出し、ルーナは言葉を途切れさせた。まるで、声に出すのが怖いとでも言うように。すると後方で様子を窺っていた水姫が、ふわふわと宙を漂い寝台に近づいてきた。彼女は枕元まで来ると、浮いた状態でジーンを覗き込む。

「水姫さん?」

ルーナが訝しげに声をかけるが、水姫は黙ったままだ。

いつものように四、五歳の幼女の姿を取っている彼女は、丸みを帯びた顎に小さな手を当て、ま

じまじとジーンを見つめている。

『おい、水姫……』

ルーナの呼びかけにも反応しない水姫に、同じ精霊王である風姫が慌てて声をかける。自らの主人は絶対。

普段であれば、ルーナに呼ばれ応えないという選択肢はない。

それでもまったく反応しない水姫の態度に、風姫も何かを感じ取ったのか、神妙な面持ちで彼女を見る。

『……瘴気だわ』

じつとジーンを見つめていた水姫が、ようやく口を開く。

「なに？」

「瘴気だど？」

水姫のつぶやきに、シリウスとレグルスが真っ先に反応した。

「どういうことです？」

その彼らの後ろから、カインが身を乗り出すようにして尋ねる。

色めき立つ皆の中で、焰王だけは部屋に入った時から変わらず、無言のまま状況を見守っている。

水姫はチラリとルーナたちに目を向けたあと、すぐにジーンへ視線を戻して話し出した。

『彼の身の内を冒しているのは毒じゃないわ。あの魔物から送り込まれた瘴気よ』

『なんじゃと!?』

水姫の言葉に、風姫が目を見開く。

精霊は、瘴気という穢れに対し、人間や獣よりも敏感に感じ取ることができる。にもかかわらず、

風姫にはそれがまったく感じられなかったからだ。

シリウスやレグルスにしても同じだ。彼らも信じられないとばかりにジーンを凝視する。

しかし水姫は、確信を持った口調で重ねて言った。

『本当よ』

はつきりとうなずいてみせた水姫に、風姫は難しい顔をする。

『だが、妾には瘴気など欠片も感じられぬぞ』

風姫の不信に満ちた様子に、水姫は落ち着いた様子で話し出した。

『ええ、そうでしょうね。瘴気は彼の血の道に流し込まれたもの。しかもほんのわずかだから、感

じ取るのは難しいわ』

『血の道にだど……』

風姫は眉間に皺を寄せ、ジーンへ視線を移す。

意識して彼を見ても、風姫には相変わらず欠片も瘴気を感じられない。しかし、これだけ水姫が

強く主張するのならば本当なのだろう。

瘴気がわずかであるということに加え、人の身という器が結界の役割を果たし、皮肉なことに瘴

気が完全にジーンの体内に閉じ込められている。風姫はそう推測した。

『うぬぬ……妾にはまったくわからぬのに……』

風姫が唸るように言う横で、ルーナは青い顔で水姫に問い質す。

「水姫さん、瘴気って……兄様も魔物になってしまふということなの？」

ルーナの脳裏に、エアデルトの王妃と、ピカーナの町の自警団員の姿が思い浮かぶ。

人が魔物になるという、信じられない変貌を遂げた二人。他にも、瘴気が獣を魔物へと変えてしまふことがあるのは皆知るところだ。

どのような経緯で魔物化するのは定かではないが、ひよつとしたら、体内に瘴気が入ることが原因なのかもしれない。

もしそうであれば、怪我どころの話ではない。

顔を青ざめさせるルーナを見て、水姫は穏やかに笑った。

『るーちゃん、大丈夫よ』

「水姫さん……」

水姫は、ジーンに真剣な目を向けて続ける。

『彼の体内にある瘴気は本当にわずかよ。わたくしが気づけたのだって、彼の血の道が、わたくしの領分だったからこそなのでも』

「領分？」

ルーナは真剣な表情で、確かめるように水姫の言葉を繰り返す。そして、ハッと顔色を変えた。

『るーちゃんは気づいたようね』

水姫の問いかけに、ルーナはコックリとうなずいてみせる。

「血液……ううん、それだけじゃなくて人の身体には多くの水が含まれている。だから、水姫さんの領分つてわけなんだよね」

『その通りよ。——この血の道に潜む瘴気を取り除ければ、彼の身体がこれ以上悪くなることはないはず。とはいえ、人体の水は自然にある水とは違うから、わたくしたちが干渉できるようなものではないけれど……』

『だが、例外はある』

水姫の言葉を引き取り、風姫は思わせぶりに告げる。

『どうということ……？』

ルーナは戸惑いながら問いかけた。

『通常は干渉することのできない体内の水だが、妾たち精霊と契約を交わした者は別だ。主と我らの間には強固な絆ができるからな』

風姫の言葉に、ルーナはなるほどと納得する。

だが、水姫と契約を交わしているのはジーンではなく、ルーナだ。

瘴気への対処方法がわかったとはいえ、精霊の契約者ではないジーンでは、それを実行することができない。

「でも、契約を交わしていない者には干渉できないんだよね？ それなら、今から兄様が精霊と契約すれば、なんとかなる？」

ルーナはそう言つて水姫を見るが、その案が現実的でないのは自覚していた。

兄妹の中でも強い魔力を持つユアンでさえ、精霊の姿を認知できるようになったのは最近のこと。それでもいまだ契約は交わせてはいない。

弟より魔力が少なく、精霊を見ることすら叶わないジーンが、そうそう簡単に契約できるとは思えなかった。

しかも今、ジーンは意識が混濁した状態なのだ。もし条件が整っていたとしても、この状態では無理と言わざるを得ないだろう。

「……駄目だよね」

自分の問いかけを自ら否定するルーナに、風姫は余計な期待を抱かせてしまったと気づいて肩を落とした。

そんな中、水姫が再び口を開く。

『ルーちゃん、聞いて』

「水姫さん？」

『本来、契約した主でもない人間に、わたくしが影響を与えることはできないわ。でもね、ルーちゃんの願いを叶えるのであれば、いくばくか干渉することは可能なのよ』

「えっ？」

『そうかつ！』

状況が呑み込めず、きよんとするルーナの横で、風姫がぼんつと手を叩いた。

「どうということだ？」

カインが口を出すと、風姫は得意顔で説明を始める。

『妾たち精霊が、契約者でもない者に必要以上の力を与えることは、世界の理として許されておらん。だがな、それが契約者の願いを叶えるためとなれば話は別だ。当然、主ほどではないが、いくばくかの干渉なら理の範疇だと見なされる』

「じゃあ、わたしが契約者として水姫さんにお願ひすれば、兄様を救えるってこと？」

期待に表情を明るくするルーナ。

すると、水姫はわずかに表情を曇らせた。

『瘴気を抑え込むことはできるわ。今もわずかだけど力を注いでいるの。けれど、もともと瘴気を浄化する力のないわたくしが完全に瘴気を排除するのは難しいわ。そもそも、対象がルーちゃんならともかく、他者ではすべての力を与えるのは無理なものですもの』

つまり、対症療法ではない。

水姫の言葉は苦い現実を知らせるものだったが、瘴気によって起こるであろう最悪の事態——魔物化が防げるだけでも十分といえた。

「わかった。水姫さん、お願い！」

ルーナが懇願すると、水姫は力強くうなずいた。それを見て、アピールするように風姫が声をあげる。

『妾も水姫を手助けする！ だからジーンは大丈夫だ』

『——俺も力を貸そう』

風姫ふうきに続き、いつの間にか近くに来ていた焰王えんおうも力強く言い放つ。  
水姫すいきは風と火の精霊王それぞれの顔を見ると、ルーナに微笑んでみせた。  
『任せて、るーちゃん。でも、さっきも言ったように、わたくしたちができるのは抑え込むことだけ。彼を救うためには「神木の実」が必要よ』

「神木の実……」

ルーナはつぶやきながら、かつてカインの腹違いの兄——エアデルトの王太子を救った貴重なアイテムの存在を思い出していた。

神木の実。

エアデルト王国の西端にあるジャスディール山脈。その北に位置する霊峰れいほうロズワルドに、実は神域が存在するのだ。

神木の実は、その名の通りそこに生える神木しんぼくからとれる実のことだ。

ルーナはエアデルトを訪れた際、重症を負ったカインの兄——エアデルトのユリウス王子を救うため、ロズワルドに向かった。

さらにそこで、神域を守る神獣ペリアヴェスタと対峙たいじし、彼の頼みを受けると引き換えに神木の実を手に入れたのだ。

一瞬で死の淵むちにある者を癒いす、奇跡の実。

神域はぐくで育まれた神木の実であれば、瘴気おぼに冒されたジーンを、きつと治すことができるだろう。

「——もう一度、エアデルトに行く必要があるのね」

ルーナは覚悟を決めた様子でつぶやいた。

そんな彼女に、カインが冷静に指摘する。

「しかしルーナ。今の僕たちがクレセニアを離れるのは難しいし、簡単には許されませんよ。」

おそらく通行許可証を発行してもらっただけでも時間がかかります。一刻を争う状況では僕たちが直接出向くのは現実的ではありません」

「そんなの、なんとかして……」

ただ感情のままに言い募るルーナ。

すると、風姫が焦るルーナの正面に立ち、その両頬に手を当てた。彼女はルーナの目をじっと見つめると、宥なだめるように言い聞かせた。

『ルーナ、焦る気持ちはわかるが、そなたでは駄目だ』

「風姫さん!？」

たとえカインやリュシオンが止めようとも、自分の味方になってくれると思っていた精霊の言葉に、ルーナは目を見開く。

風姫と水姫は、それぞれルーナを抱きしめるようにして、その頭を撫でた。

『カインも申したが、時間がない』

『許可証とやらがすぐに取れたとして、どんなに急いでも馬車で半月もかかるのでしょうか？ その間に、ジーンの容体がどう変わるかわからないわ』

「それは……」

神域は遠く離れたエアデルトにある。

往復するだけでひと月かかるのだ。準備を含めればもつと時間がかかってしまう。

「じゃあ、どうすれば……」

途方に暮れるルーナの頬を、風姫はふくふくとした小さな手で撫でた。

『落ち着け。時間がかかるのは、あくまでルーナが行くとしたら、だ』

「えっ？」

目を丸くするルーナに、水姫は片目を閉じてみせる。

『シリウスとレグルス。こやつらならば数日で神域から戻ってこれるわ』

「あっ……」

ルーナは思わず声をあげ、彼女の傍に控える獣たちへ目を向けた。

「しいちゃん、れぐちゃん」

シリウスとレグルスの前に屈み込み、ルーナは縋るように二匹を見る。

(こんな顔をされてはな……)

(否やとは言えぬ……)

ジーンに対して何も思わないわけではないが、彼らの主はあくまでルーナだ。

たとえ数日とはいえ、主人の傍を離れるのは彼らにとつて耐えがたい苦痛。しかし、このようなルーナの様子を見てしまえば、首を横に振ることなどできなかつた。

「わかつた。我らに任せるが良い」

「うむ。すぐに神木の実を持ち帰ろうぞ」

内心の不満を上手に隠し、シリウスとレグルスはルーナに告げた。

「しいちゃん、れぐちゃん。どうかお願いね」

それぞれの片足を手で包み込み、ルーナは頭を下げる。すると、獣たちは俄然張り切る様子を見せた。

「待っておれ、すぐに帰る」

「うむ。さっそく行くぞ、シリウス！」

「おう」

すっかりやる気になったシリウスたちは、お互いに声をかけあうと歩き出す。あまりの展開の速さに、戸惑ってしまったのはルーナの方だ。

「え、今すぐ？」

思わずつぶやいたルーナに、シリウスたちは顔だけを向けてうなずく。

「ああ、早ければ早い方が良いのだろう？」

「我らに準備など必要ない。すぐに行つて戻つて来ようぞ」

シリウスとレグルスはそれだけ言うと、ベランダに続く窓に近づいた。

レグルスは軽く跳躍すると、器用に窓の取っ手に足を掛ける。そしてあっさりと窓を開くと、すかさず二匹はベランダへと出た。

シリウスは開いた窓の向こうから、ルーナに声をかける。

「では行ってくるぞ、ルーナ」

「我が留守の間、ルーナのことはそなたらに任せたぞ」

レグルスは室内にいた精霊たち、そしてカインに向けて告げる。心配性な守護者に苦笑するルーナを余所に、精霊たちは真面目な顔でうなずいた。

主と離れたいというレグルスたちの気持ちがあるため、普段はルーナの寵を競い合っている精霊たちも今は神妙に応える。

「しいちゃん、れぐちゃん、気をつけて！」

「任せておけ」

「すぐに帰る」

ルーナの声に答えると、シリウスたちは一瞬にして犬猫の姿から、本来の姿である巨大な狼と獅子の姿に変わる。

そして、軽い跳躍でベランダから飛び出すと、二匹は空を蹴って旅立って行った。

十

シリウスとレグルスが去ってすぐのこと。

入れ替わるように、室内に四人の人物が現れた。一人はリュシオン。他の三人は白衣をまとった男性——医師だった。

そのうちの一人は、老年に差し掛かった男性だ。白髪まじりの緑の髪を持ち、丸い銀縁眼鏡をかけた顔には深い皺が刻まれている。

あとの二人は、金髪と黒髪をした四十ほどの男性だ。

全員、同じ白衣に身を包んでいるが、年高の医師だけは金糸の刺繍が施された肩帯を下けている。

医師たちが訪れると同時に、風姫と水姫、そして焰王の三人は姿を消す。現在その姿が見えるのはルーナだけだ。

「容体はどうだ？」

リュシオンが問うと、カインはジーンの眠る寝台へ視線を向けて答えた。

「とりあえず安定しています」

「そうか。フェイン、頼む」

リュシオンは三人の医師のうち、一番年高の男性に声をかける。

フェインと呼ばれた医師と金髪の医師が、ジーンに近づく。すると、黒髪の医師がリュシオンの前に立って言った。

「殿下、これより治療を始めます。つきましては皆さま、隣室で待機をお願いいたします」

「えっ……」

黒髪の医師の言葉に、ルーナは思わず戸惑いの声を漏らす。

冷静に考えれば治癒魔法も必要のない状況では、医師が治療に専念するため、ルーナたちが出ていくのも当然のことだ。

しかし、今のジーンは、水姫が抑え込んでいるとはいえ、瘴気しょうきを体内に取り込んでいる状況。席を外している間に何かがあったらと思うと、ルーナは素直にうなずくことができなかつた。

「ルーナ、大丈夫だ。彼らに任せよう」

リュシオンはルーナの肩を抱き寄せ、言い聞かせるように告げる。

それでもなお、不安そうにジーンへ目をやるルーナに、今度は反対側から小声でカインが説得した。

「精霊たちが見ていてくれるのでしょうか？ 何かあれば必ず彼らが知らせてくれるはずですよ」

カインの言葉に、ルーナは自分にだけ見える存在を振り返る。

それに応えるように、精霊王たちが力強くうなずいたのを見て、ルーナは神妙な面持ちおももちで、促されるまま寝室を出たのだった。

寝室と続き部屋になった居間に、ルーナとリュシオン、カインの三人はいた。

お茶を飲む気にもなれず、じりじりとした時間を過ごしていた。

長い沈黙の果て、リュシオンが重々しく口を開く。

「ジーンのことだが、親父には知らせた。とりあえず方針は、俺たちに任せてくれるそうだ。俺たちの手に負えなくなるようならば、容赦なく介入するとは言っていたが」

「ひとまず僕たちに任せてみよう、ということですか……」

カインは言うど、腕を組んで目を閉じた。

「今回の件は俺たちのミスだ。自分たちを過信しすぎたツケは、自分たちで払えということだろう。だがそれも、ジーンが生きていてくれなければ意味がない」

「兄様は死んだりしない！」

リュシオンの言葉に、ルーナは思わず叫ぶ。

「当たり前だ！ そう簡単にくたばってもらったまるか」

乱暴に返され、ルーナはリュシオンが心からジーンの生存を確信していると知る。それと同時に、過剰に反応した自分を彼女は恥じた。

「ごめんなさい、リュウ」

「気にするな。こんな状況で冷静でいるという方が難しい」

「うん……」

リュシオンの言葉に、ルーナはようやく表情を和らやわげる。場の空気が変わったのを見計らい、カインがルーナを促した。

「ルーナ、こちらも報告することがあるでしょう？」

「あ、そうだよね」

ルーナはパンツと手を叩くと、リュシオンに向き直る。

報告とは、ジーンに対する精霊たちの助力や、神木アンロツマの実で回復するであろうこと、そしてそれを採りにシリウスたちが出掛けたことについてだ。

「リュウ、しいちゃんたちがいないのに気づいてた？」

「ん？ ああ、医者が来るから別室にいるのかと思ってたが、どこにいるんだ？」  
ルーナは、リュシオンがいなかった間のやり取りを説明する。

「なるほどな。確かに『神木の実』ならばジーンを助けることができそうだ。それについてはしれぐに任せよう。ジーンの内面にある瘴気も、当座は精霊たちに任せられないな」

「ええ。僕たちはその間に、どのようにリヒトルーチェ公爵へ報告するかを考えましょう」  
カインが言うと、リュシオンはあからさまに顔を顰めた。

「公爵か……王都から出掛けていてくれたのは僥倖か。戻ってくるまでに解決しておかないと、後でどんな目に遭うやら」

「そのあたりについては覚悟するしかないでしょうね」  
「だな」

リュシオンとカインがうなずき合っていると、唐突に寝室へと繋がる扉が開く。

皆が扉へと一齐に注目する中、開かれた扉の向こうから、金髪の医師が顔を出した。

「殿下、処置は滞りなく終わりました」

「そうか。そちらに行っても良いか？」

「はい。もちろんでございます」

医師の許可が出たところで、ルーナたちはすぐに寝室へと向かう。

年嵩の医師と黒髪の医師は、それぞれ寝台の両側に立ち、ジーンを見下ろしていた。

寝台に横たわるジーンは、相変わらず赤い顔のままだったが、先ほどよりは少しだけ苦しそうな

表情が薄れている。

「ジーンの容体はどうだ？」

リュシオンが尋ねると、三人の代表であろう年嵩の医師が口を開いた。

「肩の傷に関しては、問題なく処置できました」

治療は順調だったと言っているにもかかわらず、医師の表情は硬い。

傷と瘴気による衰弱のせいだ、思ったよりジーンの容体が快方に向かわないからなのだろう。

「手は尽くしましたが……」

告げる医師を気遣うように、リュシオンは労いの言葉をかける。

「いや、よくやってくれた。ここにいる彼の妹は白魔法の優秀な使い手だが、骨まで達した傷はお手上げた」

「兄を治療していただき、本当にありがとうございます」

リュシオンに続き、ルーナは心からの感謝を込めて頭を下げた。

「滅相もございません。我らの力が及ばず、兄君の苦痛を取り除くことができず……」

「いいえ。皆さまが迅速に治療して下さらなければ、兄の容体はもっと深刻なものになっていたはずです」

「そう言っていただければ、我々も救われます。後のことはお任せするというところでよろしいのでしょうか？」

「はい、任せて下さい」

ルーナは医師に請け合う。

やり取りを見守っていたリュシオンは、カインに目配せすると口を開いた。

「皆、わかっているとは思いますが、このことは内密に頼む」

「はい。心得ております、殿下」

リュシオンの指示に、医師たちは恭しく了承する。

王宮で働く医師たちは、時には公にできない事情があることをよくわかっているのだろう。

「悪いな。俺は彼らを送ってくるから、カインはまだここにいてくれ」

「わかりました」

「ルーナ、ジーンのことは頼んだぞ」

「はい」

ルーナが了承すると同時に、リュシオンと三人の医師の姿が消えた。

医師たちに口止めしたとしても、その姿を王太子宮で見咎められれば意味がない。そのためわざわざ〈転移〉で移動することにしたのだ。

『行ったか……』

室内にルーナとカインだけが残ったのを見計らい、風姫と水姫、焰王が姿を現した。

「水姫さん、兄様はどう？」

ルーナは心配そうに訊くと、寝台に手をつけてジーンを覗き込む。

『大丈夫よ。肩の傷が塞がれば、ジーンの体力も戻るわ。そうすれば瘴気を抑え込む力も増すは

ずよ』

「よかった……」

ルーナはホッと息を吐くと、ジーンの肩に目を向けた。

傷口を覆う包帯にはうっすらと血が滲んでいる。

王宮の医師ともなれば、医師の知識だけではなく、白魔法の心得もある者が多い。しかし、白魔法使と呼ばれる者に比べれば、魔法の技術は劣る。

おそらく怪我の処置のあと治療魔法が施されたものの、傷口を塞ぐ程度で、ルーナのように完全に傷口を消してしまうことはできなかったのだろう。

ルーナは治療魔法を施そうと、ジーンの肩に巻かれた包帯を丁寧に取る。現れた傷口に、彼女は眉を寄せた。

穴が開いたようだった傷口は赤い線が残るだけになり、血も止まっている。だが、予想した通り完全に傷口がなくなったわけではなかった。

『サザール・ディア』

ジーンの傷口に手を当て、ルーナは魔法語を口にする。

魔法の発動と共に、彼女の手が白い光を放つ。そしてそれは、ジーンの傷口へすつと吸い込まれていった。

『さすがじゃの』

風姫は首を上下させながら感心する。



赤い線だった傷口は、白い光が消えると同時に消えていた。

『傷自体についてはこれで心配はいらないわね。あとの問題は瘴気<sup>しやうき</sup>だけ。シリウスたちが戻るまで、引き続きわたくしが抑え込んでみせるわ』

水姫<sup>すいき</sup>の言葉に、ルーナは張りつめていた心の糸がようやく少しだけ緩むのを感じた。すると今度は、一気に疲労が襲ってくる。

地下水路を探検し、ヒュドラと戦い、ジーンが負傷した――

一日でこれだけの事件が起こったのだ。疲れないはずがない。

「ルーナ！」

クラリとよるめいたルーナを、カインが慌てて支える。

「だ、大丈夫だよ」

ルーナはカインに凭<sup>もた</sup>れ掛かりながらも、気丈に告げた。しかし、その顔色は明らかに悪い。

皆が心配げに見守る中、火の精霊王が優雅な足取りでルーナに近づく。

「焰王<sup>えんおう</sup>さん？」

目の前に来た焰王に、ルーナは不思議そうに声をかける。

彼はゆっくりと手を伸ばすと、彼女の頬に指先で触れた。

『無理をするな』

焰王が触れた先から、じんわりとしたあたたかさがルーナに伝わり、全身に巡っていく。それと

同時に、耐え難<sup>がた</sup>いほどの眠気が湧きあがってきた。

必死に目を瞬かせ、眠気を払おうとするルーナだったが、それを阻むように焰王が彼女の頭を撫でる。

『今は眠れ』

穏やかな声と、頭を撫でる手の感触に、ルーナはゆっくりと瞳を閉じる。次の瞬間、力の抜けたルーナの身体を受け止めたカインは、彼女をそっと抱き上げたのだった。

十

ホーホーという梟の鳴き声で、ルーナは覚醒した。

(朝……ううん、夜?)

ルーナはぼんやりとした頭をふるふると振ると、ゆっくりと身体を起こす。

(家じゃない……?)

見覚えのない室内に困惑しつつ、ルーナは寝台の横に置かれたランプへと手を伸ばす。傘の部分に手を翳せば、途端に柔らかな光が辺りを照らした。

見えるのは、白塗りに金の象嵌が施された優美な家具や、ブルーグレイの壁紙。彼女が寝ていた寝台は、円形の天蓋がつけられた豪華なものだ。垂れ下がるカーテンが、寝台の優美さをさらに強調している。

白大理石の暖炉の傍には、猫足の丸テーブルと四脚の椅子が置かれており、一目で趣味の良い空

間だとわかる。

(夜の十一時……)

時間を確認したルーナは、意識がはつきりしてくると同時に息を呑んだ。

「ジーン兄様!」

居てもたつてもいられずベッドから降りたルーナは、寝室のドアを開ける。その先にある廊下を見て、ようやくここが見知った王宮の、さらに言えば王太子宮であることに気づいた。

「そっか、わたし寝ちゃったから……」

眠る前の出来事を思い出し、彼女は納得したとばかりにつぶやく。

「兄様のところへ行かなきゃ」

ルーナは独りごちると、兄が休んでいるはずの客間へと向かった。

幸いにもジーンが運び込まれたのは、彼が王宮に滞在する時に決まって使用する部屋だ。そのため彼女は、案内がなくとも辿り着くことができた。

部屋のドアをノックするものの、返事は一向にない。

人がいるとすれば、奥の寝室の方にいるのだろうと考え、ルーナは鍵のかかっていないドアを開けた。

思った通り、居間に人はいない。

ルーナは中に入ると、ジーンが眠っているであろう寝室に続くドアへ向かった。もちろん、彼の邪魔にならないよう、足音は立てずにだ。

寝室の中の様子を窺おうとドアに耳を寄せたところで、彼女はハッと動きを止める。

「……もう一度行く必要があるだろう」

「気は進みませんが、仕方ありませんね」

寝室から聞こえてくる話し声は、リュシオンとカインのもので間違いないようだ。

ルーナは話の内容から、地下水路へ再度向かう相談だと気づく。

真剣な声で話し合う彼らの様子に、なんとなくノックをして邪魔をするのが躊躇われる。

ルーナは部屋に入るタイミングを探るため、仕方なくそのまま話を聞き続けることにした。

「ああ。だがさすがに、またあんな化け物が出てくることはないだろう。とはいえ、そんな油断が今回の事態に繋がったのは確かだ。ある程度人数は揃えて行くべきだろうな」

「そうですね。ただ、軍を動かせば秘密裏というのは難しいのでは？」

「わかっている。少人数ならともかく、十人を超えるととなると、厳しいだろうな」

「他に戦力の心当たりがあるんですか？」

「ローズの傭兵団が使えないかと思っているんだ。報酬さえきちんと折り合いがついていれば、彼らは口が堅いし、信用できるからな」

「なるほど。噂に名高い『栄光』である彼らなら、力量的にも問題ありませんね」

「ああ。あとは俺が行けば十分だ」

「リュシオン？ 一人で行くつもりですか？」

カインが訝しげに尋ねると、リュシオンは明るい口調で言い返す。

「あ？ 信用できる兵士数人と傭兵たちを連れて行くと言っているだろう？ 一人じゃないさ」

「違いますよ、誤魔化さないで下さい。何故僕を同行者に入れていないのかと言いたいです」

抑えきれない怒りを滲ませるカインの声に、リュシオンはわざとらしいため息で応えた。

「……おまえは隣国の王子だ。今回の件について、俺自身で尻拭いすることは親父にも伝えてある。だが、あくまで俺に関しては、だ」

「ルーナはともかく、僕は連れて行くべきです。確かに公の立場としては自重してリュシオンの言う通りにするべきなのでしょう。ですが、僕にも譲れない矜持というものがあります。それに、ローズたちは確かに優秀でしょう。しかし、魔物相手となるとどうです？ 普段の力が発揮できない可能性もあります。だが、僕ならあなたと同じく魔物と対峙することに慣れていて。役に立つはずですよ。嫌でも一緒に連れて行ってもらいますよ」

「カイン……」

カインの強い意志を込めた言葉に、リュシオンが言い淀む。

その時――

「わたしも行くからね！」

乱暴にドアを開け放ち、ルーナは大きな声で告げた。

「は？ 何言って……」

「ルーナ？ いつの間に？」

突然現れたルーナに、リュシオンとカインの二人は目を丸くする。そんな二人を余所に、彼女は

キツと目元をきつくした。

「しっかりと聞いてたんだからね！ 地下水路には、もちろんわたしも行くから」

「おいルーナ、あのな……」

「立ち聞きとは淑女にあるまじき振る舞いですよ、ルーナ」

肩を竦め説明しようとするリュシオンと、不作法を指摘して話を誤魔化そうとするカイン。

「誤魔化さないで！ とにかくわたしも行くからね！」

「いや、普通に駄目だろ」

「そうですよ、それに誤魔化してるわけじゃ……」

リュシオンとカインは困ったように顔を見合わせる。そんな二人を、ルーナは負けじと睨みつけた。

「誤魔化してるじゃない。それから、立ち聞きが良くないことは自分でわかってる。でも今、そんなことを問題にしている場合じゃないでしょう？ だいたい話を聞かれたくないなら、ちゃんと境界を張っておかなかった自分たちを悔やんでね」

「立ち聞きしといて、堂々とこっちを責めるのもどうかと思うぞ」

いつになく強気なルーナに押されながら、リュシオンは小さくぼやく。

「だいたい、カインだって自分だけ連れて行けとかずるい！」

「ずるいつて……ルーナ、ここは聞き分けて下さい」

「そうだぞ。今回は俺に任せておけ」

なんとか説得しようとする二人に、ルーナはきつぱりと首を横に振ってみせた。

「リュウもカインも、わたしを足手まとい扱いするのはいい加減やめて！ そりゃあ二人に比べれば力が劣るのは認めるよ。でも、わたしだって魔法が使えるんだよ。それだけでも何か役に立てると思うもの」

「ルーナ、ですが……」

カインがなおも言いかける言葉を、リュシオンが彼の肩を叩いて止める。そして彼は、カインに向けて苦笑った。

「こうなったらもう打つ手なしだ。おまえが全力で足止めでもしない限り、一人で行動するぞ、こいつは」

「……でしようね」

目を合わせ、リュシオンとカインは同時に「ハア」と大きなため息をつく。それを見たルーナは、むつと唇を尖らせた。

そんな彼女の態度に苦笑した後、リュシオンは真面目な顔を作って尋ねる。

「ヒュドラはいないが、地下水路が安全とは限らないぞ」

「わかっている。それに今回は、しいちゃんたちも、風姫さんたちもいないってことも」

だが、それでも引き下がらないと、ルーナは決意を込めた強い眼差しを二人に向ける。リュシオンもカインも、覚悟を決めたのか、静かにうなずいた。

「わかった。明日、ローズに話をつける。数日中にはもう一度地下水路に潜るぞ」

「そんなに急に？」

明日いきなりローズのところへ行くとは思っておらず、ルーナは驚いて聞き返す。

「話をつけるなら早い方が良いでしょう。それに目的を考えれば、地下水路へ向かう日程も早い方がいい。今回の調査で犠牲者の遺品なども回収できれば、家族にとつて多少でも慰めになるだろうしな。前回そこまで済ませてこれればよかったが……」

リュシオンは言葉を濁すと、そつと寝台に眠るジーンへと目をやった。

「とにかく、早いうちに調査を済ませておきたい。ある程度調査できれば、あとは国に報告して、今後の対応を任せよう」

前回地下水路に赴くことになったのは、誘拐された被害者の救出と賊の捕縛が目的だった。

だが、情報の真偽が確認されていなかったため、それを確認する意味もあり、リュシオンたちが調査したのだ。

また、王都の真下という場所柄ゆえに、賊のアジトがあるかもしれないなどという情報を公にできない。だからこそ、少人数で秘密裏に決行する必要があった。

その結果、地下に凶悪な魔物があり、何人かがその犠牲になっていたことが明らかになったのだ。どんな目的で、何故、誘拐した人々を地下水路に連れ込んだのか。実行犯が見つからなかったせいで、謎はまだ多かった。

本当ならばこの時点で国がかかわるのに十分な案件だが、ヒュドラの脅威が取り除かれた後の安全確認は必要だ。

なんといつても地下水路の上には、クレセニアの王都が広がっているのだから。

秘密裏に事を進めるのならば、それを知る人間は少なければ少ないほど良い。さらに迅速に動くことで、今回の黒幕側にも何か動きがあるかもしれない。

怪しいと思われる『盲目の聖女』は行方をくらましている。彼女についても、地下水路を探れば手がかりを掴める可能性があるのだ。

「ローズさん、一緒に来てくれるかな？」

ルーナは心配そうにつぶやく。それに対してリュシオンが答えた。

「まだしばらくはピカーナに滞在していると言うし、正式な依頼であれば断らないだろう」

「万が一断られるようでしたら、何かそれらしい理由をでっちあげて、近衛あたりから数人選抜するしかないでしょうね」

カインが口元に手をやって思案すると、ルーナは思いついたように手を打った。

「ねえ、それならフレイとユアン兄様にお願ひするのは？」

良い考えだとばかりに、ルーナは目を輝かせる。だが、リュシオンとカインは、困ったようにお互いの顔を見合った。

フレイルとユアン。どちらも卒業と同時に魔法師団に入団できるほど高い魔力を持っているため、能力的には問題はない。むしろ同行してもらえれば心強いことこの上なかった。

しかし、二人は規律の厳しい軍に所属しており、しかもまだ新人だ。本当の理由を話せない状態で突然休暇を取れる可能性は低い。

また、万が一貴族の長男に何かあった場合——ジーンの回復を少しも疑っていないリュシオンたちだが——、次男はその跡を継がねばならない。今、ユアンまで危険に晒すのは避けなくてはならなかった。

二人の表情から、その理由を正確に読み取ったルーナだが、それでもなお言い募る。

「今回のこと、兄様たちが知ったらきつと自分たちも何かしたいと思うの。ジーン兄様のことは水姫さんたちや、しいちゃんたちがきつと助けてくれる。ねえ、訊くだけ訊いてみるのはどうかな？」

「確かに、ユアンならそう思ってくれるだろうが……」

「ええ。ですが、二人が協力すると言ってくれても、魔法師団入りしてまだ間もないのです。突然の休暇など申請できるはずありません」

困ったように言い淀むリュシオンに、カインが援護射撃する。しかし、そんな二人に、ルーナは明るく言い放った。

「休暇じゃなければ良いと思うの」

「は？」

リュシオンが目を見開くと、ルーナは悪戯っぽく笑う。

「リュートとカインが、兄様たちを貸してほしいって言えばどうかな？ この国の王太子と隣国の王子からの指名なら問題ないと思うけど……」

「なんだその職権の乱用は！」

呆れたようにリュシオンが声を荒らげると、ルーナは小さく舌を出して続けた。

「これは非常時だし、大丈夫じゃないかな。……たぶん。それに、あくまで必要な措置なんだから、権力を笠に着的のとは違うよ！ ……たぶん」

ルーナの言っていることはもつともだが、最後の「たぶん」で台無しだ。

「あのなあ……」

はあっと大きなため息をつくリュシオンの肩に、カインはポンツと手を置く。

「色々突っ込みたくはありますが……リュシオン、この際ルーナの提案に乗っかってみてもいいかもしれません」

「カイン？」

意外な言葉がカインから出ると、リュシオンは訝しげに彼を見た。

「視察や見聞を広めたいので、僕の護衛として二人を借り受けたというのはどうです？ 公爵家の次男であれば、僕と顔見知りであっても不思議ではないですし」

「うん、その設定ならいいと思うー！」

カインの提案に、ルーナがすかさず追従する。

リュシオンは思案するように眉間に皺を刻んだ後、ふっと肩の力を抜いた。

「わかった。それに俺の命令も足して交渉しよう」

「うん！ 兄様たちがいてくれれば、本当に心強いもの」

「そうだな」

「ええ、では早速明日朝にでも訪ねてみますか？」

「ああ、いいな」

苦笑しながら同意する二人に、ルーナは興奮を隠さず言う。

「兄様のところに行くの？ わぁ、魔法師団ってどんなところか一回でいいから見てみたかっただよね」

「は？」

「え？」

ルーナの言葉に、リュシオンとカインはきょとんと彼女を見る。二人の反応に、ルーナは「あれ？」と首を傾げた。

明らかによくわかっていない彼女に対し、リュシオンが半目で応える。

「ルーナ、おまえは留守番だ」

「ええっ！」

無情な宣告に悲鳴をあげたルーナへ、今度はカインが苦笑しながら告げた。

「遊びに行くのではないんですよ。それに、普通に考えて、貴族の令嬢が軍の施設になんて行けば必要以上に注目を浴びてしまいます」

「そうだぞ。せっかく建前を用意していったのに、妹のおまえと一緒に行ったら、単に休暇を取るだけだと思われる」

「う……」

二人の言い分がもつともすぎて、ルーナに反論の余地はない。

十

ガツクリと肩を落とす彼女に、リュシオンとカインはこっそりと目配せし合って笑ったのだった。翌日の昼。

ルーナたちは再びピカーナの町を訪れていた。同行するにあたり、今度はルーナの学校をどうするかという問題があがった。そこでまたひと悶着あつたのだが、今回は彼女が一枚上手だった。

すでにコーデリアの全面協力のもと、病欠の届けを出していたのだ。

その上で、「すぐに治るのもおかしい。むしろ、一、三日休んだ方が自然だ」と言い張った。さらには、姉アマリーにも協力を仰ぎ、口裏を合わせてくれる医師まで派遣してもらっていた。

ここまで周到に事を成したルーナに、リュシオンとカインは内心で舌を巻きながら、渋々認めるしかなかったのだ。

ピカーナの町は、町の中心地であっても、相変わらず人の姿はまばらだ。しかし、よく見てみれば、ルーナが初めて町を訪れた時より、わずかに活気があるようにも感じた。

おそらくそれは、ここ最近誘拐事件が起きていないからだろう。

そんな町の様子を眺めながら、馬車に乗った一行は町長の家へ向かっていた。

「これで町も落ち着くと良いね」

まだ怯えを隠せない人々の様子に、ルーナはポツリとつぶやく。

「そうだな……」

リュシオンは同意しつつも、内心は複雑な心情だった。

町を震撼させた誘拐事件も、いずれは忘れ去られていくだろう。

とはいえ、消えた人々の家族や恋人、友人などの身近な人間にとつては、本人が戻ってこない限り事件は終わらないのだ。

たとえ無言の帰宅であっても、帰ってきてくれればまだ良い。だが、今回の事件ではそれも難しい。すでに、遺体すらない状態だからだ。

それだけでなく、国を混乱させないよう魔物の存在を公にできない以上、彼らがどんな目に遭ったかも家族に知らされることはない。

だからこそ、被害者の家族や周辺の人間は、いつまでも心にしこりを残すこととなるだろう。いつかは彼らの心も癒されるのだろうか、それに長い時間を要するのは明らかだった。

やがて、一行を乗せた馬車は町長の家に到着した。

家の前には、町長とその妻、そしてローズと副官ベルクライスが立っている。到着の先触れを聞いて待っていたのだろう。

「ようこそおいで下さいました」

「急な訪問で済まない。先触れでも伝えた通り、今日はローズたちに用があつて来た」

リュシオンが代表して口を開くと、町長は神妙にうなずいた。

彼は、いつも交渉役を担うジーンがいないことに一瞬不思議そうな顔をするが、すぐに表情を改める。

「はい。では、客間の方にご案内いたします」

そう言つて町長は先に家の中に入っていく。その後ルーナたちとローズ、ベルクライスも続いた。

客間に案内され、ソファに座ると、町長の妻がお茶を用意する。

それで喉を潤し、しばしの雑談を交わすと、町長と妻は、ローズたちを残して共に部屋を出て行った。

「で、あたしたちになんの用だい？」

ローズは言いながら、対面のリュシオン、ルーナ、そして斜め向かいに座るカインを見ていく。不躰とも言えるローズの態度に苦笑しつつ、リュシオンは口を開く。

「単刀直入に言うが、今回『栄光』を雇いたいと思つている」

「へえ、あたしたちをね」

ローズは面白そうにニヤリと口元を緩めた。そんな彼女とは反対に、リュシオンは真剣な表情を崩さず続ける。

「ああ。おまえたちは優秀な傭兵団だ。今回の仕事は秘密裏に処理しなければならぬが、腕だけでなく傭兵としても評価の高い『栄光』ならば、その点安心だと思つている」

「おや、それは高く評価してくれたものだねえ」

リュシオンの言葉に、ローズは満更でもなさそうに笑った。

「ま、確かに、あたしたちは雇い主との信頼関係を大事にするからね。秘密を守れと言うのなら、墓の下まで持つていくさ。その辺は信用してくれていい。なんせ、それが守れないようじゃ、傭兵としては三流以下。もちろんあたしたちは一流を自負してるよ」

「わかっている。『栄光』が名高いのは、そういった仁義を通しているからってことはな」

「あはは、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。じゃあ詳しい話をしておくれ」

ローズはそう言うと、姿勢を正して尋ねる。

「そうだな。まずは一つ。頼みたい仕事は急を要するもので、二三日中には出発だということ」

「二三日中かい!?」

ローズは驚きを隠せなかった。

傭兵という仕事柄、野盗や魔物の討伐といったものが依頼に含まれることが多い。そのため、準備や計画で一週間以上を要するのが通常であった。

リュシオンが求める二三日中という期間は、かなり特殊な案件と言える。

「了解してくれるなら、詳細を話す」

リュシオンが淡々と告げると、ローズは隣に座るベルクライスを見た。

「どうするかねえ?」

「おまえの好きにすればいい。皆、それに従う」

ベルクライスが表情を変えることなく答える。

ローズは考え込むように顔を俯けていたが、しばらくして勢いよく顔を上げた。

「よし、その依頼受けようじゃないか。なに、半日あれば十分準備できるさ」

任せると言わんばかりに胸を叩くローズを見て、ルーナたちはホッと胸を撫で下ろす。

凄腕が揃う傭兵団がついてくれば、ルーナとしても心強い。

「で、詳細は?」

さっそく畳み掛けてくるローズ。

リュシオンは一つうなずくと口を開いた。

「俺たちは昨日、王都の地下にある地下水路の調査を行った。そこで魔物に遭遇し、今回の誘拐事件の被害者たちがその魔物の餌食になっただけを突き止めた」

「魔物……それじゃあ、攫われた者は、皆、生きていないということかい?」

「おそろく。俺たちが見たのは大量の血痕だ。普通の人間であれば死に至るほどのな。だが、魔物から逃げ延び、隠れている者がいないとも限らない。それを含めて、地下水路で何が起きているのか調査したいんだ」

「なるほどね。けど、どうして周囲の調査までしてこなかったのさ。あんたたちが無事なところを見ると、魔物は倒したんだろう?」

ローズは不思議そうに首を傾げる。

魔物の正体がヒュドラという凶悪で未知のもの——しかもそれが、王都の地下に巣食っていたな

ど、リュシオンに言えるはずもない。そのためローズは、巢食っていた魔物は、脅威になりえるようなものではないと結論つけたようだ。

リュシオンは眉間に皺を寄せ、軽く頭を振る。そうして苦々しい表情のまま言った。

「魔物は倒したが、俺たちも無傷ではなかった」

ローズは彼の言葉に目を見開くと、その真偽を探るようにルーナやカインへ目をやる。そして、リュシオン同様、表情を曇らせる二人に気づいた。

「そういや、公爵家の若様がないが……無傷で済まされなかったのは彼かい？」

「……そうだ」

「なるほどね」

重々しくうなずくと、ローズは腕を組んで大きく息を吐く。

「地下水路か……。大物は退治したとはいえ、魔物の巢窟なんだろうからね。事を急ぐとなれば、兵士じゃなくてあたしらを頼るのは、正しい選択だと思うよ」

「ローズさん、一緒に行ってくださいませか？」

依頼の詳細を聞き、事の大きさにやはり断られてしまうかもしれないと考えたルーナは、心配そうに傭兵団の女団長を見る。

「ああ、心配はいらないよ。依頼を断るつもりはないからさ」

すぐさま応えてくれたローズに、ルーナはホッと表情を緩めた。そんな彼女に微笑み、ローズは言う。

「実はね、あんたたちの依頼は、あたしにとっても渡りに船なんだ」

「どういうことですか？」

カインが問い返すと、ローズは一度ベルクライストと目配せして話した。

「あたしらが長くピカーナにとどまっていたのは、団員の故郷というものもあるけど、もう一つの理由があるのさ」

「理由？」

首を傾げるルーナに、ローズは「そう」と優しく微笑んだ。

「あたしにはね、行方知れずの妹がいるんだ」

「妹、さん……？」

ルーナのつぶやきに、自分自身も話したかったのだろうか、ローズはポツリと語りだす。

「八年前のことさ。あたしが留守にしている時、家が火事に見舞われた。帰ってみれば、両親も妹もその時に死んでしまったと告げられたよ」

「妹は行方知れずなんじゃないのか？」

話の矛盾に、リュシオンが反応する。

「ああ、説明が足りなくてすまないね。——妹は生きてたんだよ。うちは商家だったんだが、それなりに裕福だね。親戚の一人が遺産を自分のものにして、しかもこき使うためにこつそりと妹を引き取っていたんだ。あたしには死んだと告げておきながら……。だが、そのことがわかったのは火事から三年経った後で、あたしがその親戚の家に駆け付けた時には、すでに妹はそこから逃げ出し

ていた」

「そんな……」

家族の死を一人で受け止めたローズ。けれどたった一人の妹が生きていると知った時、どんなに嬉しく、また騙されたことを悔しく思っただろう。

しかも、ようやく妹と再会できるはずが、肝心の妹は行方知れずになっているなど、彼女の運命は過酷すぎる。

「それから妹の足取りを追ったんだが、綺麗に消えていてね。他国にもらわれていったやら、孤児院で暮らしてるやらと、妹らしき娘のさまざまな情報が入るたび、一つひとつ自分で確かめてるんだ。その情報の一つに、この近辺で暮らしてるっていうのもあつたんだよ。それもあつてピカーナに来たってわけさ。だが、本当に妹か確かめる前に、その子は今回の事件の被害者になっちまって……」

「ローズさん……」

苦しげに話すローズの心情を慮り、ルーナは顔を曇らせた。

ずっと探していた妹。

ようやく見つかったかもしれない彼女が、攫われ、すでにこの世にいないかもしれないのだ。痛まじげなルーナの視線に、ローズは強い眼差しを返す。

「ただね、あたしはまだ希望を捨ててないんだよ。今回の事件の被害者が全員魔物の餌食になったかどうかは、まだわからないだろう？」

「ええ、そうですね」

カインがうなずきながら答える。

「それに、件の子が本当に妹だと確定したわけじゃない。犠牲になった人々たちには悪いけど、あたしにはまだ希望があるんだ」

たとえ被害者の中に生存者がいなくとも、ローズの妹だと確定していない今、彼女はまだ諦める必要はないのだ。

ローズは気持ちを切り替えるように告げる。

「自分の都合もあるけど、それとは別に……被害者の家族には、形見なり情報なりを届けてあげたいと思うわけさ。何も無い、ただ人づてに聞いただけの身内の死つてのはすっきりしないよ」

ローズの言葉は、彼女自身の心情を表していたのだろう。

部屋が沈黙に包まれる中、それまで黙っていたベルクライスが口を開いた。

「ローズ、出発は二、三日中だ。ある程度の準備はもとと整っているとはいえ、団員への説明や追加で用意するものもある。俺たちはこの辺で失礼しないか？」

（あ、ベルクライスさんがしゃべった……）

無口なベルクライスから発せられた声に、ルーナはそんなことを思う。

ローズは、ベルクライスをまじまじと見るルーナの視線でそれに気づいたのだろう。ククッと小さく笑い声をあげた。

そして責めるようなベルクライスの視線を受け、誤魔化すように咳払いをする。

「……そうさね。あいつらに説明してやらないとな。じゃあ、話はひとまず終わりでもいいかい？」  
「構わない。出発のことだが、詳しい日程などについては後で連絡する。ただし、集場所については決まっている。ここだ」

リュシオンはそう言うと、懐からあらかじめ用意していた地図を取り出す。そこには昨日ルーナたちも待ち合わせ場所にした、地下水路の近くにある邸が記されている。

リュシオンが大まかな集合時刻を告げると、ローズは地図を受け取って立ち上がった。

「では、改めて詳細は連絡する」

「ああ、頼む」

「ローズさん、よろしくお願いします」

確認し合うローズとリュシオンに続き、ルーナは頭を下げる。

ローズはそれに軽く手を上げて応えようと、ベルクライスと共に部屋を出て行った。

## 第二章 垣間見える過去

乾いた大地から、細かな砂埃が舞い上がる。

周囲に建物はなく、ところどころにわずかな草が生えるのみの殺風景な景色だ。

遮るものがないため、少し先に点在している粗末なテントや掘立小屋がよく見渡せた。

その『移民の町』と呼ばれる場所を眺める、一人の少女がいた。

飾り気のない白一色の長衣と、肩先で切りそろえられた白い髪が、強い風にはためく。よく見れば、目の部分には寶石などで飾られた布が巻かれている。

少女は風にあおられる髪を押さえることもなく、ただ立ちつくしていた。

前方を見据えているように思われるが、目は布に覆われているため、それは叶わない。

(もう来てはならないと言われているのに……)

少女——モルガナは、数日前のことを思い出す。

彼女が仕える主人バルナド。

彼の企てにより、命じられるまま滞在し、人々とかかわった町だ。

バルナドからそのかわりを断ると言われた時点で、モルガナがここを訪れることはもうないはずだった。